

研究主題 「自尊感情を育てる道徳の時間の指導の工夫」

東京都教職員研修センター 研修部 専門研修課
昭島市立拝島第三小学校 教諭 坂本 千代

研究のねらい

暴力行為やいじめ、不登校の問題は、倫理観や規範意識、社会性の育成が十分ではないことや、他者を思いやる気持ちや自尊感情が欠如していることとの関連が指摘されている(「心の東京革命行動プラン」平成15年1月改訂版)。またローゼンバーグによると、自尊感情のない子どもは充実感・満足感に乏しく、不安に陥りやすくいらしたり怒りっぽい傾向が、自尊感情のある子どもよりも高いという。学校でも、このような状態の子どもの増加を実感している。

そこで、研究のねらいを、子どもたちに自尊感情を育て、子どもたちが不安に陥ることなくよりよい自己の育成を目指す道徳の時間の指導の工夫とした。

研究の内容と方法

先行研究から「自尊感情」の定義をする。

学習指導要領を分析し、自尊感情の育成と道徳教育との関連を明らかにする。

学習指導要領を分析し、自尊感情を育てる要因と道徳の内容項目や各教科等との関連を示す。

検証授業対象学級の児童がもつ自尊感情を調査し、検証授業の前後での変容を分析する。

指導計画を立てて検証授業を行い、有効な指導の工夫を明らかにする。

研究の結果と考察

1 自尊感情の定義

先行研究から、自尊感情とは、「自分を肯定的に認め、自分に自信をもち、自分を価値あるものと誇れる気持ち」と定義した。

2 自尊感情の育成と道徳教育との関連

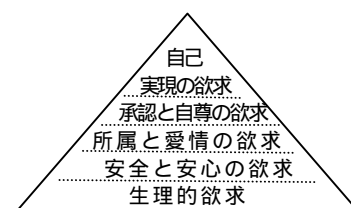
「道徳教育とは、人間が本来もっているよりよく生きたいと

いう願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動である。」と小学校学習指導要領解説道徳編に記されている。よりよく生きたいという願いはマズローの欲求階層説の中の「自己実現の欲求」にあたり、自尊感情はその下に位置する「承認と自尊の欲求」に含まれると考えられる。自尊感情が育つと「承認と自尊の欲求」が満たされ、「自己実現の欲求」の中のよりよく生きたいという願いにつながると考える。このことから、自尊感情の育成は、道徳教育と密接に関連すると言える。

道徳の時間に関しては、現行の学習指導要領の目標において、道徳教育のかなめとしての役割と重要性が強調された。また目標に「道徳的価値の自覚を深め」を加えることによって、道徳の時間が人間としての在り方や生き方の礎となる道徳的価値について学び、自覚を深め、道徳的实践力を育成するものであることを明確にしている。

内容項目においては、第1学年及び第2学年で自分の生命を見つめ、生きていることの喜びを実感できるように、「生きていることを喜び」という記述が加わった。また第5学年及び第6学年では、自らのよさを伸ばすことが強調された。「人間としての在り方」や「自らのよさを伸ばす」ことなどは、自尊感情に関連するものであるため、この改訂から、自尊感情の育成は、道徳教育に求められている大事なものの一つであると言える。

図1 マズローの欲求階層説



3 自尊感情を育てる要因と道徳の内容項目や各教科等との関連

先行研究から自尊感情を育てる要因となる様々な感情が分かったが、その中で、道徳の内容項目との関連から「自己肯定感」「自己成長感」「自己充実感」「自己有用感」「自己存在感」「自己効力感」「他者からの受容感」の7つを、道徳の時間において自尊感情を育てる要因として選んだ。これらと関連のある道徳の時間のねらいの達成を図ることが、それぞれの要因を高め、自尊感情を育てることにつながると考えた。

また、各教科等においても、学習指導要領の分析から、7つの要因と関連する学習内容が数多くあることが分かった。これを生かし、道徳の時間に各教科等の学習を関連させた年間指導計画例を作成した。

4 授業研究における工夫

年間指導計画例の中から以下の表に示した4時間の検証授業を、所属校第5学年1クラス（30名）で実施し、表中に示した工夫を行った。

表1 検証授業一覧表

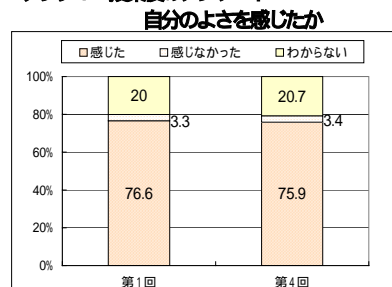
実施日	主題名・内容項目・高めたい要因等	工夫した点
第1回 7/14 (水)	主題名『働く手・がんばる手』 内容項目4-(4) 資料名「保健委員会の仕事をふり返って」 「がんばる手」 「自己有用感」「自己成長感」を高める授業	・資料の工夫(状況が分かりやすい本校卒業生の作文を活用) ・友達とかかわる活動の導入(自分の成長に気付く活動) ・各教科等との関連(委員会活動)
第2回 9/10 (金)	主題名『相手のためになることを考えて』 内容項目2-(2) 資料名「聴き方の基本を学ぼう」 「他者からの受容感」「自己存在感」を高める授業	・資料の工夫(ねらいに近付くよう副読本の資料を一部改作) ・役割演技の導入 ・保護者等との連携(授業の参観)
第3回 9/24 (金)	主題名『自分の目標をもって』 内容項目1-(2) 資料名「自信喪失が成長のとき」 「自己効力感」「自己有用感」を高める授業	・友達とかかわる活動の導入(主人公の弱い気持ちに共感する活動) ・各教科等との関連(運動会・学級活動)
第4回 11/5 (金)	主題名『みんなほんもの』 内容項目1-(6) 資料名「みんなほんもの」「そのままがいいがな」 「自己肯定感」「自己充実感」「自己成長感」を高める授業	・資料の工夫(詩集の作品と保護者等からの手紙を活用) ・保護者等との連携(手紙での協力) ・「心のノート」の活用

(1) 指導計画の工夫について

子どもたちが道徳の時間で学んだことと、日常生活とを結び付けて振り返りやすいように配慮して、実施時期を計画した。例えば、第1回の授業では、1学期末の委員会活動の反省の時期と重なるように設定し、1学期の自分の活躍が実感しやすいようにした。また、保護者等に児童への手紙を書いていた第4回の授業では、運動会という大きな行事を通して保護者等も児童のよさを確認できた時期に、手紙を依頼できるよう計画をした。効果的な時期に実施することで、各教科等との関連も図りやすくなり、各教科等での体験を道徳の時間に生かすことがしやすくなる。このように、実施時期を工夫することは、自己の振り返りに有効であるだけでなく、道徳教育を補充、深化、統合する道徳教育のかなめとしての「道徳の時間」の役割を果たすことにおいても有効である。

授業後のワークシートには、「1学期の委員会活動をしっかりやって、こんなにみんなの役に立っているとは思いませんでした。」(第1回)とか「自分のいいところがこんなにあるとは思いませんでした。ぼくは、メッセージを読んで、このままでいいんだと思いました。」(第4回)など、日ごろの体験を振り返る活動を通して、自己有用感や自己肯定感が高まったことが分かる感想が多く、

グラフ1 授業後のアンケート



授業後のアンケート（グラフ1）にも自分のよさが感じられたことが現れていた。

(2) 資料の工夫について

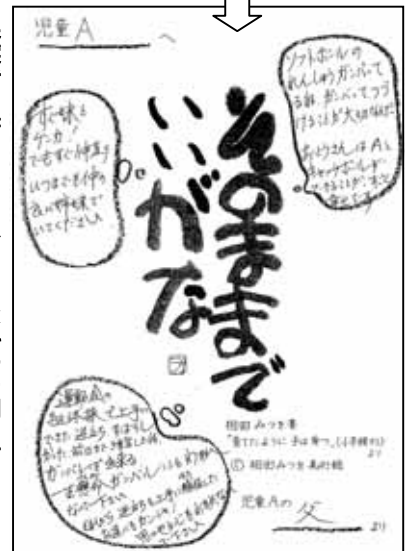
教育庁指導部から平成11年3月に発行された「道徳教育推進資料」は、道徳の時間の課題として「学年が進むにつれて道徳の時間を楽しんでいる子どもが減少する。指導過程がパターン化している。単に内容項目を教え込むだけの指導になっている。」と指摘している。資料は7つの要因に関連しているという視点で選択した上で、上記の指摘も踏まえ、副読本の読み物資料、卒業生の作文、詩集の中の作品など、多様なものを選んで指導過程がパターン化しないようにした。また、主体的な取り組みでねらいに迫ることができるものを選ぶことで、道徳の時間を楽しめるようにした。その上に、人間の弱さも描かれた資料から児童があるがままの自分を受け入れやすいものを選ぶようにした。

資料選択の理由

- ・「そのままがいいがな」という言葉が、自己肯定感を分かりやすく表現している。
- ・保護者等に児童の「そのままがいいがな」と思う部分を具体的に書いてもらうことで、児童が自分に自信をもち、自己肯定感を実感できる。
- ・自尊感情の育成について、今後も保護者等と協力し合えるきっかけができる。

授業後のワークシートには「メッセージを読んで、とてもうれしかったです。お母さんは、私にこんなことを思っていたんだなあと思いました。これから、お母さんにほめられることやお母さんの役に立つことをやっていきたいです。」「これからも今のままでいいんだなあと思ったし、うれしかったです。これからも自分のままでがんばっていきたいと思います。」(第4回)という記述があった。新たな発見があったり共感したりできる資料を通して、自己肯定感や自己充実感を高めたことが分かった。

保護者に書いていただいた資料の一例(第四回)



5 児童の変容

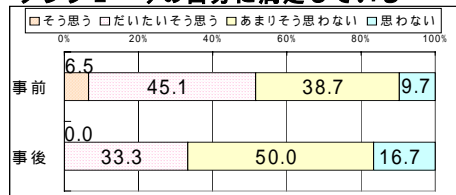
検証授業対象学級の児童に、検証授業の事前の6月と事後の11月に、自尊感情の調査を行った。6月の調査結果からは、「学校生活を楽しみ、自分のよさやがんばりを認めている部分もあるが、自分に満足したり自分が好きだと思ったりするほどの気持ちにはなっていない。

自己有用感が、十分感じられていない。将来の夢をもち、自分のよさを伸ばそうという前向きな気持ちをもっている児童は多い。」という実態が分かった。

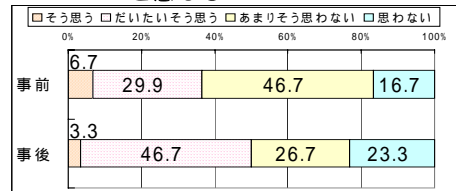
11月の調査では、グラフ2のように、自分に満足したり自分が好きだと思ったりする気持ちが減少していた。しかし、グラフ3から分かるように、自己有用感に向上が見られた。また、グラフ4のように、自分のがんばりを認めたりよさを伸ばそうという前向きな気持ちは、6月よりもさらに向上した。

一方、道徳の時間には次のような変容が見られた。

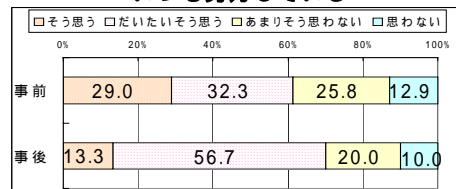
グラフ2 今の自分に満足している



グラフ3 自分が周りの役に立っていると感じる



グラフ4 自分のよい面を伸ばそうと、いつも努力している



- ・ 9月まで、毎時間「楽しくない」とアンケートに答えていた児童が、第3回の授業に関連した学級活動での運動会の振り返りを通して自信をつけ、10月以降は生き生きとした表情を見せ、道徳の時間を楽しく過ごすようになった。
- ・ ワークシートを記入するときに、誰にも見られないように必死に手で隠して書いていた児童が、隠さないで書くようになった。
- ・ 挙手して発言できなかった児童が、積極的に発言するようになった。 ... などである。

【第4回のワークシートの記述より】

・ 母からもらったメッセージを読んで、自分のいいところが分かりました。自分で自分のいいところを探すのは大変で、本当にそこが自分のいいところかなと思うけど、友達や親や先生などに言われてみると、自分で考えるより自信がもてるし、言われたことを意識して、これからもそのことができるといいなと思います。メッセージの中で、母は、運動会の組体操でやった倒立の練習をあきらめずがんばった私を「すごい！」とほめてくれました。そして、私と一緒にやってくれた友達にも、私に「感謝しなきゃね」と書いてありました。私は、そのメッセージで、あきらめずがんばることはとても大事だけど、**自分でもっとそれを生かしてがんばりたい**と思いました。

・ 私は家の人からもらった「そのままがいいがな」のメッセージを読んで、私の本物はここだと初めて分かりました。そして、家の方は、私のことをこんなふうに思ってくれているんだなと思いました。とてもうれしかったです。私はこれから本当の自分を大切に、今回、書いてもらった**本物の自分でもっとよくなるようがんばりたい**です。

上の記述にある「自分でもっとそれを生かしてがんばりたい」「本物の自分がもっとよくなるようがんばりたい」という思いの現れとも感じる様子は、3学期になって見られ始めた。自分についての肯定的な認識が文章に表現されたり、苦手な学習にも投げやりにならずに取り組みたりすることが増えてきた。互いのよさを認め合える場面も多くなってきた。

このような変容から、道徳の時間のねらいを達成することで高まったと考えられる要因の中には、実際の活動と結び付いて定着しやすいもの（自己有用感）と、日常の出来事に左右されがちなもの（他者からの受容感や自己効力感等）と、定着に時間がかかるもの（自己肯定感や自己成長感等）があると考えた。

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

各教科等や保護者等との連携を含めた計画的な授業時期の設定や自尊感情を育てる7つの要因との関連を図ったねらいの設定等の指導計画を立てる工夫、多様な資料を活用する工夫等を行うことによって、内容項目と関連する自尊感情を育てる7つの要因を高めると、自尊感情の育成につながる事が分かった。

4回の検証授業だけでは、道徳の時間に高まった自尊感情を定着させることが難しかった。しかし、事後調査後の変容に見られるように、まず自己有用感を実感した児童が、徐々に自分への価値を感じるようになるなど、道徳の時間の効果は、比較的是っきりと現れるものと、短期間には多くを期待できないものがあることがよく分かった。年間指導計画例では、時間がかかるものを重点化したり、体験活動と関連付けたりして指導する計画を立てた。

「自尊感情を育てる」というねらいをもって自己の振り返りがしやすくなる工夫をした道徳の授業を重ねることにより、自己肯定感や自己充実感等を高めることができると、これからもっと自分をよくしたいという前向きな思いを児童が自発的にもてるようになることが分かった。

2 今後の課題

作成した年間指導計画例を年間を通して実践し、継続した取り組みの有効性を検証したい。他学年での指導の工夫や個に応じた対応を考えていきたい。